

自信満々な幼馴染のライバルに旅先で絡まれる話

雨ざらしの鷺

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

マサラタウンから旅に出た新米トレーナーのレッドくんがライバルと切磋琢磨「要出典」する。そんな話。

目次

プロローグ	旅立ち	1
第1話	本当の旅立ち	4
第2話	トキワシテイの攻防	7
第3話	喧嘩	17
第4話	敗北	20

プロローグ 旅立ち

いつかの時代――

ここはカントーのマサラタウン。マサラは真っ白、始まりの色――

「おお！待っていたぞ！レッド！」

「……ん」

私の名前はオーキド。皆からはポケモン博士と呼ばれておるよ。ポケモン…ポケットモンスターというのは、森や池に住む人間以外の生き物たちのことじゃ。モンスターボールに入ってしまったえばポケットに入っちゃうくらい小さくなるモンスターだからポケモン。人はそんなポケモンをペットにしたりポケモン同士勝負させたりしている。

今日は私の孫と、そしてその幼馴染…、私からすればもう一人の孫のようなもんじゃな。その二人が旅に出る日。

研究所の扉を開けて赤い帽子をかぶった少年がやって来る。彼はレッド。先ほど言った孫の幼馴染で無口だが素直な少年じゃ。

(しかし、二人ももう旅に出るようになるとは…。改めて子供の成長は早いもんだと感じさせられるのお…)

こんな感想を抱くとは私も年を持ったもんじゃ。ちよつと目元が熱くなるのを感じながらレッドとともに授けるポケモンがいる部屋へと歩いていく。せっかちなうちの孫はそこでレッドはまだかまだかとずっと急かしておる。先に行けばいいものを、レッドを待つあたりなんていうかまあ…。

「ところでレッド、ちゃんと旅の用意はできてるか？」

「ん…」

レッドは口数少なく小さくうなづく。これもいつものことなのでまあ大丈夫じゃろう。

「ではレッドよ、お前にポケモンをやるう！これからともに旅をする

パートナーじゃ」

「!!」

長い付き合いで語らずともレッドが期待に胸を膨らませてるのがなんとなくわかる。はじめてポケモンとパートナーになるのだから当然か。

では、さっそくポケモンと対面させてやるか。

「ここにお前たちにやるポケモンがおっそくい! レッド! お爺ちゃん! 待ちくたびれたよ!」……っ

ドアを開けるや否や、元気のあり余った声が響く。ほんとにせつかな孫娘め…。

「これから冒険の旅が始まるのに、もう!」

「ふう……、落ち着け、リーフ。ほれ、ちゃんと今から二人にポケモンを渡す。そんなせつかちじゃと先が思いやられるわい」

「むう…だって楽しみだったんだもん…」

頬をぷくぷくと膨らませてむくれているのが孫娘のリーフ、レッドとは長年の幼馴染で親友じゃ。

「ほれ、そこに三つのモンスターボールがあるじゃろ? そこからお前に一匹ずつやろう」

「ふふくん、私は大人だからね! レッドに先に選ばせてあげるよ!」

…リーフが調子に乗ってるときは大抵墓穴を掘る前兆じゃが…、まあいつものことだし放っておくか。

「ほら、早く早く」

「……じゃあ……こいつ……」

「ほう! 草タイプのフシギダネを選ぶんじゃな?」

「えっ!!?」

「……」

「……」

レッドがフシギダネを選ぼうとすると、リーフが予想外といった声を上げて目を潤ませる。

……フシギダネがよかったなら最初からそう言えばいいものを…。

「……………じゃあ…こっちで……………」

「…ほ、ほう！炎タイプのヒトカゲを選ぶんじゃな！」

「……………」

哀れに思ったのかレッドが気を使って選びなおす。涙目だったリーフの表情がみるみる輝く。

「そ…そつかあ…！…！それじゃあ私は、この子にしようかな！うん！よろしくね、フシギダネー！」

……………まあ、本人たちが納得しているならいいか。色々と先行きは不安じゃが…。

「では、二人とも！夢と冒険とポケットモンスターの世界へ旅立つのじゃー！」

第1話 本当の旅立ち

夢にまで見た旅立ちの日、オーキド博士から俺のはじめてのポケモン、ヒトカゲを貰った。

「……よろしく」

「カゲツ！」

ボールから出して挨拶をすると元気に返事をしてくれる。可愛くて頼もしい奴だ。

憧れのポケモントレーナーとしての第一歩がこれから始まる。その思いを胸に研究所を後にして俺の冒険が始ま——

「あー待ってよーレッド！」

「……………」

研究所を出た途端に背後から元気の良い女の子の声で呼び止められる。振り向かなくても誰かわかる。これに何年付き合わされてきたか。

「せっかくお爺ちゃんからポケモンをもらったんだよ！勝負しようよ！」

振り返ると自信満々な顔で幼馴染がボールを構えていた。

白い帽子にロングヘア、それにちよつと目のやり場に困る際どいミニスカートと、これから旅に出る女の子の格好にはあまり思えない。それも鼻屑目に見ても凄く可愛い、美少女と違って間違いない女の子がそんな恰好をしてるんだから相手するこつちの気持ちにもなつてほしい。

(しかもなんでバッグをたすき掛けにしてるんだ……)

冒険のために用意したんであろうバッグが胸の谷間を通り、最近成長して膨らんできた胸を強調していて上半身までも思春期の男子としては目のやり場に困る。

……眼福じゃないかって？

長年一緒にいた幼馴染をそういう目で見てるなんて気づかれたら、これからどう接すればいいんだ。罪悪感が凄い。

……少し前まではリーフでそんなこと意識することなんてなかった

たのに、最近そう言う目で見てしまう自分が嫌になる。

「ねえ！聞いているの？！勝負しようよ」

「……………ん」

「へっへ〜ん！そう来なくっちゃ〜！行くよ！フシギダネ！」

「ダネ!!」

帽子を目深に被って視線を遮ることで何とか煩惱を振り払う。

(それに…何よりはじめてのポケモンバトル…!!夢にまで見たトレナーとしての始まり…!)

「カゲッ！」

ボールからヒトカゲを出し、リーフのフシギダネと対峙する。

帽子を深くかぶるのは俺にとって気持ち切り替える合図で、今の俺にはポケモンバトルのことしか見えない——!!

「……………ひっかく」

「フシギダネ！たいあたりー！」

先手を取ったのは俺のヒトカゲ。フシギダネを爪で引っ掻きダメージを与える。フシギダネも攻撃に耐えて反撃に転じる。

「……………もう一度…!」

「えっ!?ああ！フシギダネ！」

すばやさではこつちが上。そう判断した俺は苛烈に攻め続ける作戦に出る。作戦が上手く嵌まったのか攻防に少しずつ差が付いていく。

「……………行け…!」

「カゲエ!!」

「ああっ！そんな〜！」

ヒトカゲの渾身の一撃が隙を見せたフシギダネに決まり、リーフとの勝負に勝った。

「……………むう〜…!」

「……………」

「ぶうっ。…って何するの〜！」

悔しさをほっぺを膨らませるリーフを見て、ついイタズラしたくなつて指で頬をつつく。

間の抜けた声を漏らしてほっぺが萎む。楽しい。

「……よし！これからいつぱい頑張つて次こそレッドに勝つからね！」

「……………」

(近い！近い！)

リーフが前かがみになって俺の顔を覗き込んでくる。顔同士が近づいてせつかくバトルに集中して打ち払った煩惱がぶり返してくる。こいつは自分の顔の良さに自覚がないのか？

「よし！どどんバトルして強くなるからね！じゃあねレッド！」

負けをバネにかえて気合が入ったリーフは俺より先にマサラを出発して走っていった。

「……………ヒトカゲ、頑張ろう…」

「カゲ？」

残された俺は勝負に勝つたはずなのに、なんか負けたような気持ちで突っ立ってた。それと――

(白…)

やっぱリーフのあの格好はやめさせないと、と思った。

第2話 トキワシティの攻防

ここはトキワシティ

トキワはみどり えいえんのいろ

「ういー…、そして弱ったところで、ヒック、ボールを投げらんだけだあー！」

マサラタウンを旅立ち、隣のトキワシティにたどり着いた。

酔っぱらったお爺さんがポケモンの捕まえ方を教えてやると、半ば強引に俺を捕まえ実演してみせる。

……酒臭いのはともかく、駆け出しの俺にとっては貴重な助言だった。酔ってる割にはボールもちやんと投げてたし、「若い頃は凄腕のトレーナーだった」というのも案外本当なのかもしれない。

(……俺もとっ捕まって絡まれたし)

「どうだあ〜！捕まえたぞお〜！」

と、まあ、面倒な酔っ払いかと思っただが意外と勉強になったのも事実で頭を下げてお礼を言う。お爺さんも機嫌よくなって解放してくれたし。

(……もう夕方か…、今から北の森に入っていくのは危ないし、今日はトキワのポケモンセンターで休むか…)

田舎のマサラタウンと違い、トキワにはポケモンの傷を治したり、トレーナーの宿泊所になるポケモンセンターがある。

いずれは野宿を避けられない場面もあるかもしれないが、旅も始まったばかりで無茶をする意味もない。今日のところはポケモンセンターで休むとする。

(フレンドリーショップでボールや傷薬も買った。ジムが休業中なのは残念だけど仕方ない…。まずは森を超えてニビシティのジムを目指すか)

ポケモントレーナーの最終目標の一つにポケモンリーグへの挑戦がある。

最強のポケモントレーナー・リーグチャンピオンを決めるセキエイ

高原のポケモンリーグ。そこに挑戦するにはリーグ公認の8つのジムを廻り、ジムリーダーに認められないといけない。

いずれは俺も挑戦してみたい。そのためにも焦らずこの冒険で成長しなくては。

旅の決意新たにポケモンセンターを訪れる。ポケモンセンターはたびをするトレーナーを広く受け入れてくれて、俺みたいな駆け出しの子供が旅をする上での心強い味方だ。

「ようこそ、いらっしやいませ！ポケモンの回復と、ご宿泊ですね？」
「……………ん」

受付のお姉さんの問いかけに頷き、トキワまでの旅路で頑張ってきたヒトカゲの入ったボールを渡し、お姉さんからは宿泊する部屋の鍵を渡される。これで明日の出発までにヒトカゲも元気になってるだろう。

「よかったですね。これが今日最後の空き部屋でしたよ」
(危ない、危ない。いきなり野宿なんてシャレにならないところだった)

危機一髪をギリ回避して胸をなでおろす。と、まあその瞬間だった。

「す、すみません!!一部屋空いてますか!？」

聞き覚えのある……………というか毎日聞いている声が後ろから聞こえたのは。

「あ、あの……………申し訳ありません。たった今、満室になってしまいました……………」

「そ、そんな……………」

聞き覚えのある声の持ち主が情けない声で受付カウンターに継りつく。……………非常に残念ながら聞き間違いではなかったらしい。見覚えしかない女の子の姿が横目に見える。

「……………あつ」

宿なしになった少女がこっちに気づく。無性に嫌な予感がする。

「レッドお……………っ!」

ぎゅっ

「~~~~っ!!」

涙目のリーフが俺の腕に抱き着いてくる。柔らかい感触が押し付けられて、なんか、もう、やばい

「……………っ、相部屋……………できますか…?」

理性がゴリゴリ削られていく中で絞り出したセリフに俺はさらに後悔する羽目になる。

「……………」

『♪』

「……………」

(落ち着け落ち着け落ち着け落ち着け落ち着け)

冒険初日の夜にして既に最大級の危機が俺を襲う。具体的にはシャワーの音とかだ。

リーフの無自覚な猛攻に会いながら発したセリフは俺の取った部屋にリーフも泊めるというものだった。

(女の子…………、それも幼馴染を見捨てるわけにはいかないんだから俺がやったことは正しいはずだ……………!……………たぶん)

普段は満室になることなんてそうそうないらしいトキワのポケモンセンターなのだが、なんでもトキワのジムが急遽休業になったせいで立ち往生するトレーナーがいるらしく部屋数がギリギリだったということだ。

さすがにスタッフの方々も鬼ではないのでリーフみたいな女の子を野宿させたりはせず、スタッフ用の部屋を臨時で貸し出すとか緊急の対応もあつたらしいが、幼馴染の俺がいたこともありこれが最良の方法となったわけだ。

(……………ほんとにこれ最良?……………というか俺が持たない気がする)

本来シングルの部屋に無理やり二人泊まつてるんだからまずいこ

とに既になつてる。

(例えばリーフがシャワーを浴びてる音とか……！)

『ん……、あ……、気持ちいい……♪』

「っ!!!」

一人用だもん。宿泊室内の中の防音なんて想定されてない。寝室にまで浴室の音がしつかり聞こえてくる。

シャワーがリーフの肌を打つ音も、気持ちよさそうな声も全部聞こえてる。このままだと最悪リーフに軽蔑される未来が待っている。一見天国のようでこれは地獄の拷問だ。

キュツ……キュツ……

『……ふう』

シユル……ぱさ……

シャワーの音が止まって衣擦れの音が聞こえる。判決を読み上げられる犯罪者の気持ちは今がよくわかる。

「お風呂、先に貰ったよ」

「……!!!」

タオルで長い髪の水気を拭きながら湯上りのリーフが浴室から出てくる。火照って赤らんだ顔に少し大きめのパジャマ姿。リーフの完全に気を許してる姿に胸が早鳴る。

「ごめんね、レッド。部屋に泊めてもらった上にシャワーまで……」

(うわあああああっ!!シャンプーの匂い!!距離近い!!)

「……………入ってくる」

「あ、うん」

これ以上、一緒にいたらやばい。風呂に入ると理由をつけてこの寝室を速攻で後にする。

「あつ！洗濯物、あとで頂戴ね。さすがに洗濯くらいはやらないと申し訳ないからさ」

「……………ん」

極限まで無関心を装って浴室へと逃げ込む。ドアを閉じ寝室に聞こえないように息を殺してしゃがみ込み、

「ふう………!!!」

思いつきりいろんなものが混じったため息を吐いた。もう無理だ限界だ。

(なんであんな無防備なんだ…!!もつと警戒しろよ!!男だぞ、俺!!なんで相部屋に喜んでんだよ!!危機感!!もつと持てよ!!)

言えないけど言いたいことは山ほどある。異性との距離感とか、あのめちやくちや可愛いパジャマ姿とか、動き回るのに向いて無いスカートとか、バッグのかけ方とか。

(おまけに洗濯って…いや、俺があいつのも洗うよりいいけど…!)
冒険してるトレーナーのために個室ごとに洗濯機も設置してある。もちろん洗濯機は一台なので一緒に洗わないといけないのだが、このタイミングで言われるとどうしても意識してしまう。

(……………落ち着こう。シャワー浴びて気持ちをリセットしよう…、うん)

汗も煩惱もまとめて洗い流してしまいたい。服を脱ぎ浴槽でシャワーを浴びようとして俺は気づいてしまう。

(……………さつきまでここ、リーフが使ってたんだよな?……………!?)

—————

「……………」

「あ、お帰り。洗濯物もらうね。……………?どうしたの、疲れた顔してるけど?」

「……………」

……………無心になって脱いだシャツやズボンをリーフに渡す。冒険と言うのは大変だということが初日から分かった。というか旅に出る前までは毎日遊んでた幼馴染が途端に牙を剥くなんて誰が読めるというのか。

疲れた体で椅子に沈み込む。

「いけるかな〜って思ってポケモンリーグの方に行ってみただけで見張りの人が通してくれなくてさ、なんとか通り抜ける方法考えないと

ね」

「……………ん」

「でもまあ、遠回りしたおかげで早速ポケモンゲットできたし、順調かなー！レッドはもうポケモン捕まえた？」

「……………ん」

「うっ…、わかってるよお…夢中になったせいで宿取り逃したのは…、反省してるよ〜」

「どうやらリーフはさっそく新しいポケモンを捕まえたらしい。そのせいでこんな目に合ってると思うとジト目で睨むくらいは許されると思う。まあリーフらしいといえばリーフらしいけど。」

「自信満々でせっかちな割に抜けてるところがあつて、でもそのおかげもあつて俺の知らないところへ先に行つてる凄いやつだと思う。」

「それよりさー！レッドのポケモンは強くなつた？」

「!?」

「凶鑑ちよつと見せてみてよ！ほら〜」

パジャマ姿のリーフが椅子に座る俺の背後から詰め寄り、凶鑑を見せろと肩を掴んで揺すつてくる。リーフの顔が俺の顔のすぐ横に近づき、髪の毛の甘い香りがする。少し視線を横に向ければまだ赤らんでるリーフの顔がすぐ傍にある。

「隠さなくてもいいじゃん〜！見せてよ〜」

「……………!!」

とにかく離れて欲しくて首を縦に振りまくる。せっかく滅した動揺が即蘇生させられた。

「へえ〜…ポッポに…コラツタ、ビードルかあ…。私の方が見つけた数も多い！ふふ〜んっ」

リーフは得意げになつてドヤ顔で胸を張る。薄手のパジャマで胸を張られると成長途中の胸部が強調されて、ほんともう勘弁してください。

「どうやら凶鑑完成も私がいれば十分？レッドの出番はないかもね！」

「……………宿取れなかつた癖に……………」

「うっ！悪かったって…ぷう」

「……………」

「ぼえっ、…ってまたやったなく！」

またむくれたリーフの頬をつついてやると、膨れたほっぺが萎んで変な声が出る。これくらいの仕返しは許されるだろ。

「……………ふわぁ」

「あ、レッドも眠い？私も…ちよつと疲れたし、眠いかも…、ふぁ…」
汗も流したし、なんだか眠くなってきた。明日は森を抜けなきゃいけないし早めに休むか…。

「……………おやすみ…」

上着を羽織ってこのまま座って目を閉じる。まったく…：…疲れる一日目だった…。

「つてこら！椅子で寝ないの!!ちゃんとベッドで寝なさい！」

……………人が寝ようとしてるのに揺すり起こされる。

ベッドが一つしかないのに何を言ってるのか。いくら俺でも女の子を椅子で寝させるほど外道ではない。ベッドくらい譲ってやる。そんな感じの心の声を乗せた視線をリーフにぶん投げてやる。

「う…、レッドが取った部屋なのに私だけベッドで寝るなんてできるわけないじゃん…。だ、だからね、ほらっ！」

リーフがシングルベッドをバンバンと叩き何かを訴える。

「だ、だからあ…！そ、そのね、…………二人で…ベッドで寝ればいいじゃん……………」

……………

顔を赤くして視線を逸らしながらリーフが難しいお言葉をおっしゃられる。

……………チヨットナニツテルカワカラナイ。

整理して考えると、さっきのベッドバンバンはこっちに来いという意味なのかもしれない。俺が椅子で寝ようとするのをリーフとしては許容できない的なことをもしかしたら言ったのかもしれない。だ

からといってリーフを椅子で寝かせるなんて断固拒否、という俺の意向をさすがの幼馴染は感じ取ってくれたのだろう。

で、以上を踏まえた上でリーフさんの先ほどのセリフを下品な下心を一切排除して都合よく解釈せずに考察すると？

「……………」

「さ、さすがに…狭いね…？あ、あはは…っ」

……………今の状況を整理しよう。

狭いシングルベッドに二人並んで横になってる。

誰が？

……俺とリーフが。

話しかけてくるリーフの声が近い。息遣いまで感じられて良い匂いがする。

……………俺、顔真つ赤じゃないか？灯り消してるから気づかれてないと信じたいたい。

リーフは平気なのか？……………今はともリーフの顔を直視できそうもない。

「……………なんだか久しぶりだね？レッドと一緒に寝るの……、小さい頃はよく一緒に寝たよね」

「……………」

「……………ごめんね、レッド。私のせいで」

「……………」

「……………うん、ありがとう」

今更気にすんな、ってニュアンスを長年の付き合いでリーフはちやんとわかってくれる。

「ん……………でも……………ほんとに……………レッドがいて…むにや……………よかった……………。レッドなら…あんしん……………」

(……………安心して、やっぱり俺って異性として見られてない…？)
嬉しいような妙に虚しいような……………

さすがに疲労が勝って意識が眠りに落ちていく……………

(……………おやすみ、リーフ)

(……………朝からもう疲れた……………)

ポケモンセンターで一夜を明かし、目を覚ました俺に待ち構えていたのは新たな試練だった。

目が覚めるとリーフがなぜか俺の腕に抱き着いたまま寝てて、離れようにも起こすわけにもいかず、リーフが離れるまで身動き一つ取れなかった。

……………すごい柔らかかった。

しかも寝言で俺の名前を呟くし、男を勘違いさせるプロトしか思えないこの幼馴染。

そんな朝の拷問をなんとかリーフに気取られずに脱出し、リーフが起きる前にさっさと着替えてしまおうと夜のうちに乾燥まで終えてくれた洗濯機を開けた俺はバカだった。

俺のシャツと一緒に出てきたのはリーフの……………

(~~~~~!!!)

はい、忘れた！1、2のポカンで綺麗に忘れた！俺は何も見えてない！

とまあ何事もなく、リーフも目を覚まして、俺達はポケモンセンターを出発して別れた。

別に何もなかったけど、気持ちを切り替えるべく道中のポケモンと戦ったり捕まえたりして、昼には無事トキワの森の入り口にたどり着いた。何もなかったけど！

で、これから俺はこのトキワの森を抜けてニビシテイまで向かう。カントーでも最大級の規模のトキワの森は大きい木々が立ち並んで昼でも薄暗いがここを超えなくてはいけない。

「……………行くか」

これこそ俺が憧れてた冒険だ。気合を入れて入り口ゲートのドアを開ける。

「ほら遅いよ！早く先に進まないと言が暮れちゃうよ！」

「……………」

ゲートに入ったとたんに聞こえたのは、とてもよく聞きなれた声。顔を上げれば案の定、見慣れた幼馴染。

「あっ、ちよ、ちよつと待ってよ〜！無視するなあ〜！」

薄暗くて一人じゃ怖いから一緒に行ってくれる奴を待ってた、と推測される幼馴染をスルーして森に入ろうとしたら若干涙声で腕にしがみ付かれた。

冒険二日目にして早くも先行きが不安になってきた。

第3話 喧嘩

ハナダは みずいろ しんぴのいろ
はなさく みずの まち

「出口……！」

長い洞窟を抜け、ついに俺は外に出ることができた。

険しい山道、黒づくめの服を着た怪しいガラの悪いトレーナーとの
連戦でもうクタクタだ。

「…………ハナダシティ……！」

洞窟の出口になっている山の中腹から次の目的地ハナダシティが
一望できる。苦労の甲斐あって、多分この景色俺はずっと忘れないと
思う。

(本当に……大変だった……！)

ここまでの度を振り返れば、トキワの森では半ば強引についてきた
リーフに振り回された。

普段はあんなに自信満々なのに意外と怖がりなもんだから、木々が
揺れて音を立てるだけで……

『きゃっ！何!?!』

『……………！』

腕に抱き着いてくるし……

『わあ〜！ピカチュウ！かわいい〜っ！レッド！見て！ってどうした
の?!』

『……………別に』

可愛いポケモンに遭遇すれば夢中になってミニスカートでしゃが
み込むし……

『ええい！お前ら！神聖な虫ポケの聖地で……羨ま……やかましいぞ
!!勝負しろ!!』

『えっ!?ポケモン勝負!?やるやる！行くよ！フシギダネ！ほらっ、
レッドも!』

騒ぎすぎて虫ポケモンを捕まえに来てたトレーナーに勝負を挑ま

れて目を輝かせてまたはしゃいだり…。

まあ、はじめでのダブルバトルってやつを経験できたのはありがたかったが……

『くそ〜！こんなカップルに負けるなんて〜』

『カップ……っ!?ぜ、全然違うから!!ねえレッド!?!』

『ちくしょく〜!!』

(……はつきり斬り捨てられるとそれはそれで傷つくな……)

駆け出しのトレーナーに負けたのがショックだったのか、虫取り少年くんは走り去ってしまった。

そんなこんなでニビシティまでたどり着けたものの、このままだとお月見山でも同じ目に合うのが予想できたので念には念を入れて釘刺しておいた。

………ただ帰ってきた返答が……

『レッドの……バカー!』

予想外だった。あいつ、そんなに怖がりだったのか。

そのまま走り去られて喧嘩別れみたいになったのでこっちまで結構凹んだ。言い過ぎたかもしれないけど、やっぱり一緒に一人前のトレーナーを目指すんだから森とか洞窟も自分とポケモンとで乗り越えて欲しかった。

それからリーフには会えずじまいだ。

その後、ニビジムリーダーのタケシと戦った時、リーフが先にバツジをもらったって言ってたから俺より先を進んでるんだろう。お月見山のふもとのポケモンセンターでも会わなかったし一人で乗り越えたみたいだ。

「……リーフ」

途中まではうんざりしてたけど、いざ会えないと少し心配だ。

(どこかではぐれたり怪我したりしてないよな?)

リーフだって女の子だ。しかも正直凄い可愛い。なにかトラブルに巻き込まれたりしてないだろうか。

(……大丈夫、だよな……?)

ポケットにしまっていたポケギアを手取る。

洞窟を抜けて電波も届くようになったのでリーフのポケギアに「ごめん」ってメールを送ってみる。

(返事、あると良いけど……)

PIPIPIPIPI!

(早！)

奥つてすぐポケギアから受信音がする。

メールには一言、「ばか」と書いてあった。

(人が心配してたのに……！もういい……！)

PIPIPIPIPI!

「！」

ムカついてメールを消してやろうとした瞬間にまた新しいメールが届く。

今度もまたリーフからでメールには今度は二言。

【ごめん ありがとう】

(……無事ならいつか)

結局いつものパターンだ。どうでもいいことで喧嘩して、どつちかが折れて謝って、いつも張り合ってる相手に謝られると謝られた方も頭が冷えて謝り返して。

幼馴染の無事も確認して一安心したことだし、山を下りる。さすがに疲れた。ハナダシティでゆっくり休もう。ポケモンたちも休ませたいし。

(今頃、リーフはどこまで行ったんだろ？ どんどん行っちゃう奴だからハナダのジムバッジも貰ってヤマブキとかクチバまで行ったか？)

疲れてはいるけど、リーフに追いつかなきゃと思うと気合は湧いてくる。冒険を続けてればまたどこかでばったり会うだろうし、その時に向こうがビックリするくらい強くなってる。

「うん、勇気出して誘ってみるよ！ フシギソウ……あ」

「……………」

再会は予想以上に早かった。ハナダについた途端にまるで凶られたかのように奇跡的にリーフに出くわした。

第4話 敗北

「あ……」

「……………」

ついさつきメールで謝った相手にたまたま出くわすとはなんと気まずいことか。

こんなのラジオ番組の抽選で一等を当てる並の確率だ。リーフも予想外なのか完全に固まってる。

相変わらず旅をしてるとは思えないミニスカートとノースリーブのシャツで、背丈はちんちくりんな癖に成長するところはしつかり成長した体つきがたすき掛けされたバッグのせいでさらに強調されている。最近リーフと話をするだけでドキドキしてる自分がいる。

「……………」や、やあレッド！まだお月見山をうろちよろしてたの？その間に私は凄いの強いのおたくさん捕まえて絶好調だよ！」

あまりの気まずさにリーフのやつ、いつもの自信満々な調子で何事もなかったかのようにゴリ押しそうとしてる。

(まあ…、この方がリーフらしくて好きだけど)

なんか心配していた分、いつもの調子でこっちの方が安心させられる。

「どれどれ、レッドはどう？ちよつと見せてみてよ！行けー！ピジョーン！」

「!？」

油断していたところをリーフが勝負を仕掛けてくる。

まさかの展開だがこっちもトレーナーである以上、挑まれた勝負には応えないといけない。

「ピカチュウ」

「ピカア！」

「あつ、可愛い………じゃなくって！コ、コホン、…でんこうせっか！」

繰り出したピカチュウに目を輝かせるが、さすがに油断まではして

くれない。ピジョンの攻撃がピカチュウを追い詰める。

(…まずい…こっちは山越え直後で余力もないのに…！)

お月見山の野生のポケモンに加えて怪しい黒づくめ立ちとも戦ったからこっちは万全じゃない。しかもリーフのやつ、かなりポケモンを育ててる。タイプのには有利なはずのピカチュウが追い詰められていく。

「でんきショック…！！」

「すなかけ！」

「ピツ!?」

「ふふん！外れ！かぜおこし！」

ピカチュウ得意のでんき技で形勢逆転を狙うが砂をかけられ攻撃が外れる。技の後の隙を突いてリーフのピジョンが手痛い一撃を喰らわせる。

「……戻れ、ピカチュウ」

(……無理させてごめん…。よく頑張った)

戦闘不能になったピカチュウをボールに戻す。お月見山でも頑張ってくれて疲れているのによく頑張ってくれた。

「リザード！」

他のポケモンもリーフのポケモン相手に戦えるほど余力はない。あとは俺のエースにすべてを託すほかない。

「レッドのヒトカゲも進化したんだ！でも、私のフシギソウも負けな
いよー！」

「フシヤー！」

リザードに対してリーフはフシギソウを繰り出す。博士からも
らったフシギダネが進化した、おそらくリーフにとってのエースだ。

「……ひのこー！」

「わっ！よーし…！フシギソウ！やどりぎのタネー！」

リザードが先手を取り抜群の威力の攻撃を喰らわせるが、リーフの
フシギソウもそれに耐える。フシギソウの蕾から種が飛び、リザード
に植え付けられる。

「っ……ひのこー！」

「耐えて！フシギソウ！」

「……………！！フ…シヤ！」

「よし！次は…ねむりごな！」

（しまった……！）

リーフの狙いに気づき短期決戦を目論むも、相手の体力を奪うやどりぎのタネで回復していたフシギソウはリザードの猛攻に耐えて今度は粉を飛ばす。

フシギソウのねむりごなでリザードの動きが止まる。

「フシギソウ！とどめの…つるのムチ！」

無防備に隙を晒してしまったリザードにフシギソウの得意技がクリーンヒットする。

「……………戻れ、リザード……」

「やった！私の勝ちー！」

手元に戦えるポケモンがない。俺はリーフとの勝負に負けた。

「これでマサラでのリベンジ成功！さすが私のポケモン！」

「……………」

悔しい。

ほかならないリーフに、競い合うライバルに負けたのが悔しい。リザードもピカチュウも頑張ってくれたのに勝たせてあげられなかった。

（せめて万全の状態であら……！）

ただとお月見山での疲労で俺のポケモンたちはベストコンディションじゃなかった。全力で戦えてたら負けてなかったはず。

「フシギソウ、お疲れ様。よく頑張ってくれたね」

（……………！）

リーフがフシギソウに駆け寄って労う。

それを見て、今さらになつてフシギソウの体にリザードが与えたものではない傷があることに気づく。

（リーフたちも万全の状態じゃなかった……）

万全なら勝てたなんて言うのが自分の驕りだということに気づかされる。それどころか戦う相手のコンディションにすら戦いが終わ

るまで気づけない自分に腹が立つ。

リーフはマサラでの負けをバネに、万全じゃなくとも俺に勝てるだけの自信と実力を身につけて勝負を挑んだ。ふんぞり返ってた俺なんて追い抜いて当然だ。

「ふふん！レッドがのんびりしてる間に強くなり過ぎちゃったかな？」

「……………」

悔しい。努力し続けたリーフが凄いと素直に思えるだけに悔しい。

マサラで負けた時のリーフも表に出さないだけで、こんな気持ちになつてたのかもしれない。トキワで宿を取り逃すくらい遅くまで冒險してたのも俺に負けたくなかったからだっただろう。そんな事にも気づかず天狗になつてた俺は…。

「そ、それじゃあ…、勝つたんだから、レッドには私の言うこと、一つ聞いてもらおうかな？」

「……………ん？」

「だ、だからっ、レッドには私の命令に従ってもらいますっ！……………やっぱ、だめ？」

「……………」

勝つたリーフの口から初めて聞くルールが発せられる。なぜか俺がリーフの命令に従うことになってる。

(俺は負けたんだ。負けた以上、俺にできることなら飲むか)

断じて、言ってみたものの不安になって上目遣いに首を傾げるリーフにやられたからじゃない。背が低いからそういう仕草が自然で威力が凄いこととは関係ない。

「ん……」

「えっ、ほんと？ほんとに!？」

「…?!うん……」

俺が首を縦に振るとリーフは目を輝かせて大喜びする。

(……………俺、何させられるんだ?)

わざわざ俺を巻き込むなんてどんな難題が言い渡されるのか。今更首を縦に振ったことを後悔したくなる。

「じゃ、じゃあね……、その……」

「……………」

(なんか…妙に焦らすな…)

あのリーフが言いよどむことっていったいなんだ？怖くなってきたんだが。

「き、今日はもう遅いから、明日！明日の朝ね！」

散々焦らしておいてまさかのこの発言である。心の中でずっこけた。

「い、いいから明日！明日の朝、ポケモンセンターの入り口ね！じゃ、じゃあね！お休み！」

言うだけ言ってリーフの奴、足早にポケモンセンターの方へ去っていった。

「……………行くか……………」

呆気にとられたけど、ポケモンたちを休ませなきゃいけないし俺もポケモンセンターへと向かう。

いったい俺は明日、何をやらされるんだ？